

第11節 植物

対象事業実施区域及びその周辺における植物に係る状況を調査し、工事中における土地造成、樹木の伐採及び供用時における地形改変、建築物・工作物等の存在、夜間照明等に伴う周辺環境への影響について予測及び評価を行った。

11-1 調査

1. 調査項目

対象事業に伴う植物への影響について予測するための基礎資料を得ることを目的に、表5-11-1に示す項目について調査を行った。

2. 調査方法

各調査項目における調査方法及び調査時期・頻度は、表5-11-1に示す内容で実施した。

表 5-11-1 植物の現地調査方法

環境要素	調査項目	調査方法	調査時期・頻度
植物 ・植物相 ・植生 ・注目すべき 個体、集団、 種及び群落	植物相	任意観察	早春季、春季、夏季、 秋季（4季）
	植生	植物社会学的手法 現存植生図作成	夏季、秋季（2季）
	注目すべき個体、 集団、種及び群落	注目すべき個体、 集団、種及び群落 が確認された場合に、 生育地の日照条件、 土壌条件、斜面方位、 周辺植生等の確認	早春季、春季、夏季、 秋季（4季）

注) 調査項目、調査時期等については、調査地域の植物に精通した方からの聞き取りなどによる情報を参考に設定した。

1) 植物相

調査地域内にて任意観察を行い、維管束植物（シダ植物以上の高等植物）の全出現種の同定及び記録を行った。

注目すべき個体、集団、種及び群落が確認された場合は、GPSを用いて確認地点を把握するとともに、種名、個体数、生育環境、生育状況などを記録した。

2) 植生

(1) 植生分布

植生分布については、調査地域内に成立する植物群落について、その広がりや分布状況等を平面上に記録し、現存植生図の作成を行った。

(2) 植物群落（群落組成）

調査地域内において確認された植物群落について、各群落1地点ずつの調査枠（コドラート）を設け調査を行った。

種組成の把握にはブラウン-ブランケの全推定法を用い、調査地域に出現した植物の被度、群度を階層毎に測定する植物社会学的調査を行った。

① 被度

被度とはコドラート内で各植物種が地上を被う割合を表したものである。

ブラウン-ブランケの全推定法による被度区分を表5-11-2に、被度別模式図を図5-11-1に示す。

表 5-11-2 ブラウン-ブランケの全推定法による被度区分

被度	条件
5	被度が調査面積の3/4以上を占めているもの。
4	被度が調査面積の1/2以上～3/4未満を占めているもの。
3	被度が調査面積の1/4以上～1/2未満を占めているもの。
2	個体数が極めて多い、又は被度が調査面積の1/10以上～1/4未満を占めているもの。
1	個体数は多いが被度は1/20以下、または被度が1/10未満。
+	個体数も少なく被度も小さい。

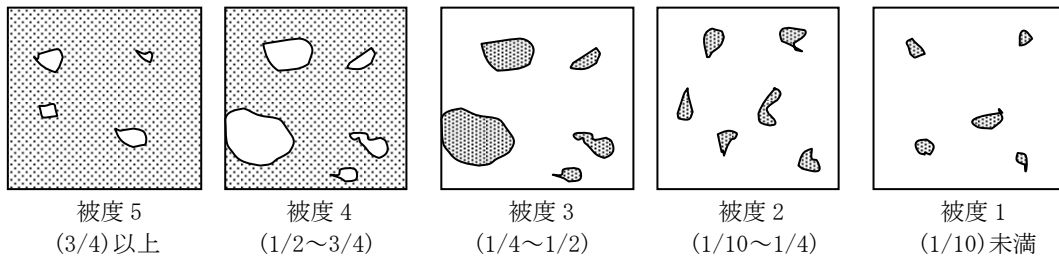


図 5-11-1 被度別模式図

② 群度

群度は優占度の大小とは関係なく、コドラート内における植物種の配分状態を表したものである。

群度区分を表5-11-3に、群度別模式図を図5-11-2に示す。

表 5-11-3 群度のランク区分

群度	条件
5	コドラート内でカーペット場に一面に生育しているもの。
4	大きなまだら状、またはカーペットのあちこちに穴のあいた状態。
3	小群のまだら状のもの。
2	小群をなしているもの。
1	単独で生育しているもの。

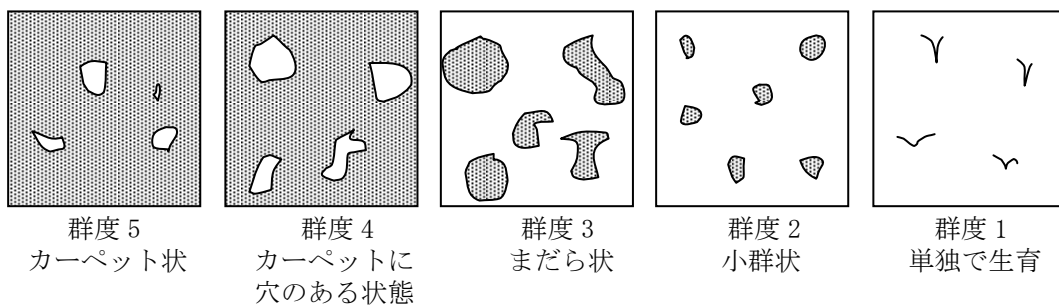


図 5-11-2 群落別模式図

3) 注目すべき個体、集団、種及び群落の選定基準

植物の注目すべき個体、集団、種及び群落の選定は、表5-11-4に示す法令や文献を基準として行った。

表 5-11-4 注目すべき個体、集団、種及び群落の選定基準

No.	選定基準となる法律・文献など
I	「文化財保護法」(昭和25年5月30日 法律第214号) に示されている種 <ul style="list-style-type: none"> ・ 特別天然記念物 (特天) ・ 天然記念物 (天) 「文化財保護条例」(昭和50年4月1日 長野県条例第44号) に指定されている種 <ul style="list-style-type: none"> ・ 県天然記念物 (県天)
II	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律 (種の保存法)」(平成4年 法律第75号) に示されている種 <ul style="list-style-type: none"> ・ 国内希少野生動植物 (国内) ・ 国際希少野生動植物 (国際) ・ 緊急指定種 (緊急) ・ 生息地等保護区 (生息)
III	「環境省レッドリスト」(平成24年 環境省) の掲載種 <ul style="list-style-type: none"> ・ 絶滅 (EX) ・ 野生絶滅 (EW) ・ 絶滅危惧 I A類 (CR) ・ 絶滅危惧 I B類 (EN) ・ 絶滅危惧 II 類 (VU) ・ 準絶滅危惧 (NT) ・ 情報不足 (DD) ・ 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)
IV	「長野県版レッドデータブック-長野県の絶滅のおそれのある野生生物-植物編」(平成14年 長野県) の掲載種及び掲載群落 <ul style="list-style-type: none"> ・ 絶滅 (EX) ・ 野生絶滅 (EW) ・ 絶滅危惧 I A類 (CR) ・ 絶滅危惧 I B類 (EN) ・ 絶滅危惧 II 類 (VU) ・ 準絶滅危惧 (NT) ・ 情報不足 (DD) ・ 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)
V	「長野県希少野生動植物保護条例」(平成15年 長野県条例第32号) の指定種 <ul style="list-style-type: none"> ・ 指定希少野生動植物 (指定) ・ 特別指定希少野生動植物 (特別)

注) () 内には略称を記した。

3. 調査地域及び地点

植物の調査地域は、図5-11-3に示す対象事業実施区域から200m程度の範囲内、対象事業実施区域の両側の谷部を含む小流域及び生活排水処理水・雨水排水の放流先として想定される湯川を中心とした範囲を基本とした。

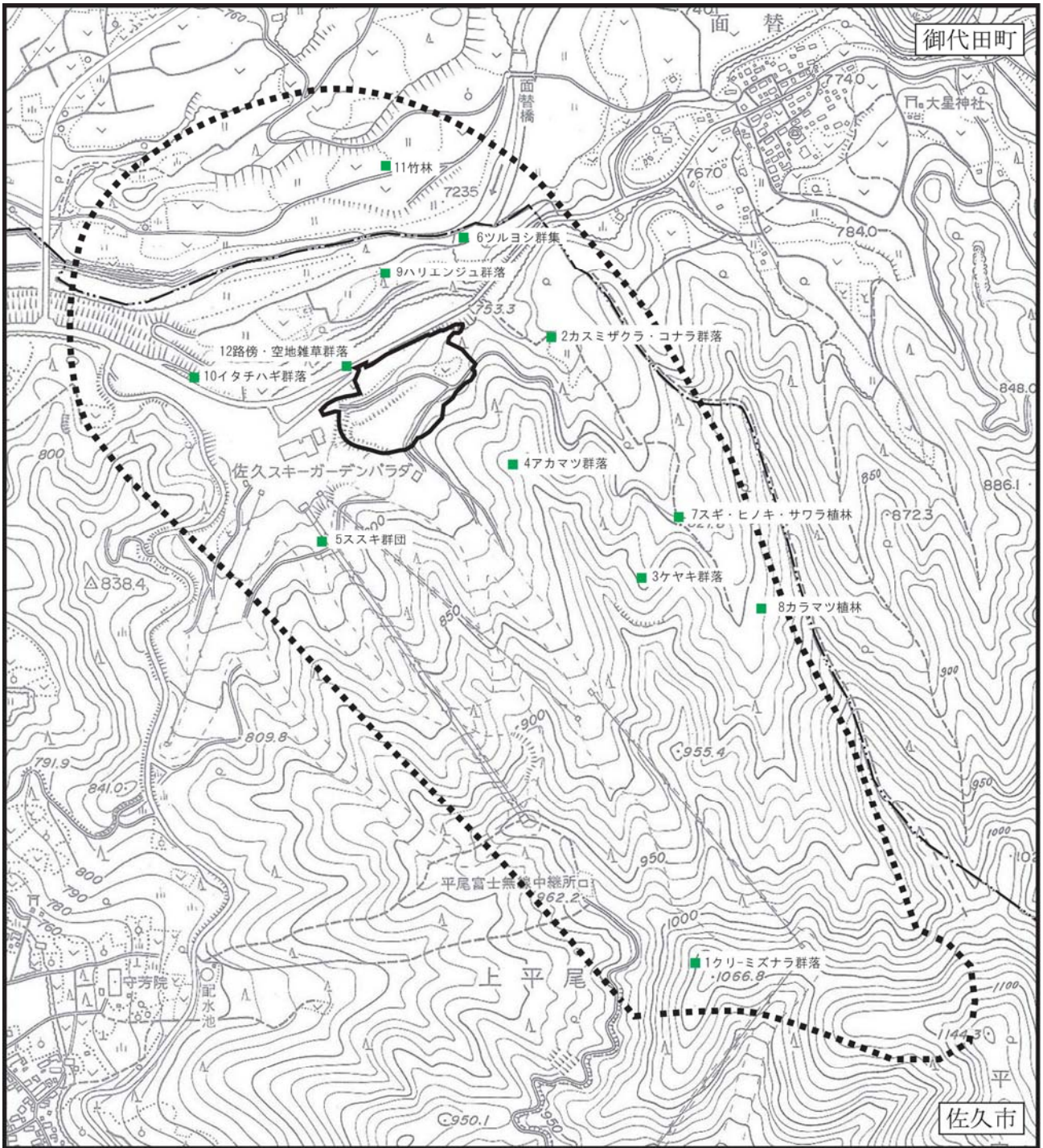
植物相調査地域及び群落組成調査地点を図5-11-3に示す。

4. 調査期間

調査は、表5-11-5に示す期間に実施した。

表 5-11-5 調査実施期間

調査項目	調査実施期間
植物相	早春季：平成 25 年 4 月 25～26 日
	春 季：平成 25 年 5 月 23～24 日
	夏 季：平成 25 年 8 月 5～ 7 日
	秋 季：平成 25 年 9 月 30 日～10 月 2 日
植生	夏 季：平成 25 年 8 月 5～ 8 日
	秋 季：平成 25 年 9 月 30 日～10 月 2 日
注目すべき個体、集団、種及び群落	早春季：平成 25 年 4 月 25～26 日
	春 季：平成 25 年 5 月 23～24 日
	夏 季：平成 25 年 8 月 5～ 8 日
	秋 季：平成 25 年 9 月 30 日～10 月 2 日



凡 例




-  : 対象事業実施区域
-  : 植物調査地域 (植物相調査: 任意観察)
-  : 群落組成調査地点

図 5-11-3 植物調査地域及び群落組成調査地点図

--- : 市町界



5. 調査結果

1) 植物相

(1) 確認種

現地調査の結果、表5-11-6に示す113科615種の植物が確認された。

なお、植物の確認種リストは資料編に示す。

表 5-11-6 植物確認種内訳表

分類群			対象事業実施区域						代表的な種	
			内		外		計			
			科数	種数	科数	種数	科数	種数		
シダ植物門			9科	13種	11科	36種	11科	38種	イワヒバ、ワラビ、クモノシダ、オシダ、イヌワラビ	
種子植物門	裸子植物亜門		3科	6種	4科	10種	4科	10種	カラマツ、スギ、ヒノキ、アカマツ	
	被子植物亜門	双子葉植物綱	離弁花亜綱	160科	170種	56科	263種	56科	277種	バッコヤナギ、コナラ、ケヤキ、ミゾソバ、ウツギ
				21科	77種	26科	140種	26科	150種	エゴノキ、イボタノキ、ガマズミ、オオブタクサ、サワギク
	単子葉植物綱		9科	68種	16科	132種	16科	140種	キバナノアマナ、ススキ、エナシヒゴクサ、ササバギンラン	
合計			202科	334種	113科	581種	113科	615種		

調査地域は内陸に位置し冬季に乾燥するため、日本海要素の植物は少なくオシダやダンコウバイ等が僅かに確認された。西日本ー太平洋要素の植物としては、イヌブナ、フクロシダ、スズダケ、コアジサイ、チョウジザクラ等が確認された。調査地域の標高は700～1,000m程度であり、寒地・北方系要素のヤエガワカンバ、エゾヤマザクラ、オウレンシダ、オオカワズスゲ、エゾノタチツボスミレ等が確認された。

対象事業実施区域内では、未舗装の駐車場とその周りは落葉広葉樹林となっている。駐車場の路傍・空地雑草群落では、オオバコやヤハズソウ、オヒシバ等が確認された。駐車場周辺の落葉広葉樹林においては人の手が入っており、ササバギンランやクモキリソウ、イカリソウ等が確認され、里山として良好に管理されてきた林であることが伺える。

対象事業実施区域外は、平尾富士山頂付近のミズナラ林から湯川沿いの耕作地及び河原まで環境の変化も大きく、確認種数も多くなっている。

国外外来種としては、スキー場駐車場等にシロバナシナガワハギ、コセンダングサ、メマツヨイグサ等が確認されたほか、湯川沿いではハリエンジュが河畔林を形成していた。また、特定外来生物に指定されているアレチウリが湯川沿いで確認された。

2) 植生

(1) 植生分布

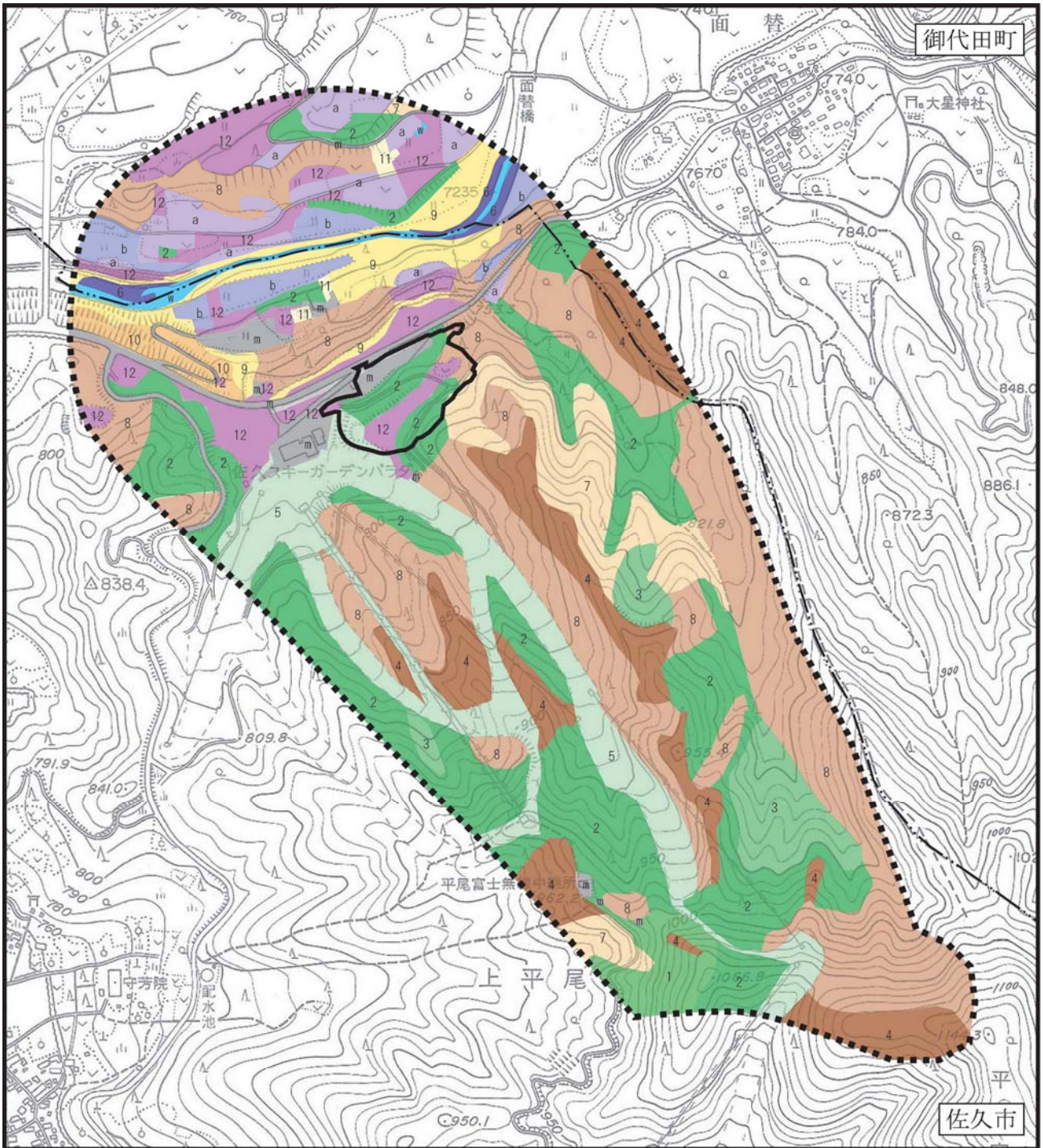
現地調査の結果、樹林植生9単位、草地植生3単位の植物群落を確認された。これら植物群落の他、土地利用区分、人工地、開放水面の凡例を加え、分布状況を現存植生図に整理した。植物群落別の面積を表5-11-7に、現存植生図を図5-11-4に示す。

調査地域の植生は、カスミザクラコナラ群落等のブナクラス域の代償植生とカラマツ植林などの植林地・耕作地植生で占められていた。

対象事業実施区域は、中央に路傍・空地雑草群落があり、それを取り囲むようにカスミザクラコナラ群落が分布していたほか、一部にススキ群団やカラマツ植林、スギ・ヒノキ・サワラ植林がみられた。

表 5-11-7 植物群落等別面積

No.	群落タイプ	群落名	対象事業実施区域				計		
			内		外		面積 (ha)	比率 (%)	
			面積 (ha)	比率 (%)	面積 (ha)	比率 (%)			
1	ブナクラス域 代償植生	クリーミズナラ群落			2.2	1.8	2.9	1.8	
2		カスミザクラコナラ群落	1.2	44.0	24.7	20.9	26.0	21.5	
3		ケヤキ群落			4.2	3.6	4.2	3.5	
4		アカマツ群落			10.9	9.2	10.9	9.0	
5		ススキ群団	0.2	7.5	12.0	10.2	12.2	10.1	
6	河辺・湿原・ 塩沼地・砂丘 植生	ツルヨシ群落			0.8	0.6	0.8	0.6	
7	植林地・耕作 地	スギ・ヒノキ・サワラ植林	0.1	2.1	6.4	5.4	6.5	5.3	
8		カラマツ植林	0.2	7.1	32.1	27.2	32.3	26.7	
9		ハリエンジュ群落			4.9	4.1	4.9	4.0	
10		イタチハギ群落			1.3	1.1	1.3	1.1	
11		竹林			0.3	0.3	0.3	0.3	
12		路傍・空地雑草群落	0.7	23.6	6.7	5.7	7.4	6.1	
a		畑地			4.1	3.4	4.1	3.4	
b		水田			2.8	2.4	2.8	2.3	
m		その他	人工地	0.4	15.7	3.7	3.2	4.9	3.5
w			開放水面			1.0	0.9	1.0	0.8
合 計			2.8	100.0	118.1	100.0	121.0	100.0	



凡 例

○ : 対象事業実施区域

⋯⋯ : 植物調査地域

- | | |
|------------------|----------------|
| 1 : クリミズナラ群落 | 12 : 路傍・空地雑草群落 |
| 2 : カスマザクラ・コナラ群落 | a : 畑地 |
| 3 : ケヤキ群落 | b : 水田 |
| 4 : アカマツ群落 | m : 人工地 |
| 5 : ススキ群団 | w : 開放水面 |
| 6 : ツルヨシ群集 | |
| 7 : スギ・ヒノキ・サワラ植林 | |
| 8 : カラマツ植林 | |
| 9 : ハリエンジュ群落 | |
| 10 : イタチハギ群落 | |
| 11 : 竹林 | |

図 5-11-4 現存植生図

— : 市町界



1:10,000

0 200m 400m

(2) 植物群落（群落組成）調査

調査地域内において確認された植物群落を対象に、各群落1箇所ずつ、植物群落（群落組成）調査を12箇所を実施した。

調査地点の概要を、表5-11-8に、確認された群落の概要を表5-11-9(1)～(2)に示す。

表 5-11-8 植物群落調査地点の概要

No.	群落名	群落高		調査面積	出現種数	
		夏季	秋季		夏季	秋季
1	クリーミズナラ群落	22m	22m	20m×20m	23種	22種
2	カスミザクラ-コナラ群落	20m	20m	10m×10m	37種	36種
3	ケヤキ群落	18m	18m	15m×15m	48種	49種
4	アカマツ群落	25m	25m	20m×20m	47種	46種
5	ススキ群団	1.2m	1.5m	4m×4m	23種	22種
6	ツルヨシ群落	2m	1.2m	2m×2m	6種	2種
7	スギ・ヒノキ・サワラ植林	12m	12m	10m×10m	37種	37種
8	カラマツ植林	25m	25m	20m×20m	63種	55種
9	ハリエンジュ群落	18m	18m	15m×15m	32種	33種
10	イタチハギ群落	2m	2m	2m×2m	10種	10種
11	竹林	10m	10m	10m×10m	16種	16種
12	路傍・空地雑草群落	1.5m	0.3m	2m×2m	19種	18種

表 5-11-9(1) 確認群落の概要（調査地点）

番号・群落名	群落の概要
No.1: クリーミズナラ群落	標高1,000m付近の急斜面に成立していた。 植生調査地点では、高木層はミズナラが優占していた。低木層はツリバナが優占し、アズキナシやウリカエデ等が確認されたほか、草本層ではスゲ属の一種やタガネソウ等が確認された。出現種数は夏季23種、秋季22種であった。
No.2: カスミザクラ-コナラ群落	舟ヶ沢沿いの耕作放棄地やスキー場の残存林に成立していた。 植生調査地点では、高木層はコナラが優占しており、低木層はダンコウバイやカスミザクラが確認された。草本層ではフジやアケビ等のツル植物が多く確認された。出現種数は夏季37種、秋季36種であった。
No.3: ケヤキ群落	平尾富士北斜面の比較的湿った谷筋に成立していた。 植生調査地点では、高木層、亜高木層はケヤキが優占しているが、植林されたカラマツやヒノキも確認された。低木層はアブラチャンが優占し、草本層はケチヂミザサが優占していたほか、ハナタデやクサコアカソ、ミズヒキ等のやや湿った所にみられる種が多く確認された。出現種数は夏季48種、秋季49種であった。

表 5-11-9(2) 確認群落の概要 (調査地点)

番号・群落名	群落の概要
No. 4 : アカマツ群落	尾根筋を中心に成立していた。 植生調査地点では、高木層はアカマツが優占し、比較的なだらかな斜面ではカラマツが混生していた。亜高木層を欠き、低木層ではカスミザクラ、コナラ、ウワミズザクラ等が確認された。草本層はヒカゲスゲが優占していた。出現種数は夏季 47 種、秋季 46 種であった。
No. 5 : ススキ群団	スキー場の定期的に草刈りが行われるゲレンデに成立していた。 植生調査地点では、ススキが優占し、コスカグサやナルコビエ等のイネ科草本やユウガク等が確認された。出現種数は夏季 23 種、秋季 22 種であった。
No. 6 : ツルヨシ群落	湯川沿いの増水時に冠水する場所に成立していた。 植生調査地点では、ツルヨシが優占していたほか、アメリカセンダングサやオオブタクサが確認された。秋季調査時には台風による増水で冠水し、ツルヨシの茎は倒れた状態であった。出現種数は夏季 6 種、秋季 2 種であった。
No. 7 : スギ・ヒノキ・サワラ植林	ヒノキの植林地は舟ヶ沢右岸に、スギの植林地は平尾富士無線中継所近くにそれぞれまとまって成立していた。 植生調査地点では、高木層にヒノキが優占し、亜高木層、低木層を欠いていた。草本層では、ウチワドコロやヘビノネゴザ等が確認された。出現種数は夏季 37 種、秋季 37 種であった。
No. 8 : カラマツ植林	カラマツ植林は調査地の全域に広く分布していた。 植生調査地点では、高木層はカラマツが優占し、亜高木層を欠いていた。低木層はアブラチャンが優占し、マタビ等のツル植物が絡みついていた。草本層はエナシヒゴクサが優占していた。出現種数は夏季 63 種、秋季 55 種であった。
No. 9 : ハリエンジュ群落	湯川沿いのやや湿った所に成立していた。 植生調査地点では、高木層はハリエンジュが優占していた。低木層はイヌコリヤナギが優占し、ケヤキやタチヤナギ等やや湿った場所に生える木本が確認された。草本層は、スゲ属の一種が優占し、オオブタクサやセイタカワダチソウ等の放棄耕作地に侵入する外来種のほか、キツネガヤやシラネセンキュウ等のやや湿った林内に生える植物が確認された。出現種数は夏季 32 種、秋季 33 種であった。
No. 10 : イタチハギ群落	道路法面に植栽された低木群落である。 低木層はイタチハギが優占し、ヤマハギも確認された。草本層は、ナガハグサが優占し、オニウシノケグサやオオブタクサ等も確認された。出現種数は夏季 10 種、秋季 10 種であった。
No. 11 : 竹林	湯川左右岸にわずかにみられた。 植生調査地点では、高木層はハチクが優占し、亜高木層、低木層を欠いていた。草本層はケチヂミザサが優占していた。出現種数は夏季 16 種、秋季 16 種であった。
No. 12 : 路傍・空地雑草群落	未舗装の駐車場や放棄耕作地に成立していた。 植生調査地点では、ヨモギが優占し、ミチヤナギやオオバコ等が確認された。シロツメクサ、セイヨウタンポポ、ヒメジョオン等の外来種が多く確認された。出現種数は夏季 19 種、秋季 18 種であった。

3) 注目すべき個体、集団、種及び群落

(1) 注目すべき種

現地調査により確認された植物種のうち、注目すべき種は、表5-11-10に示す11科12種であった。

注目すべき種の一般的な生態及び確認状況を表5-11-11(1)～(2)に示す。

表 5-11-10 注目すべき種リスト (植物)

No.	科名	和名	選定基準 ^{注)}					確認時期				確認位置	
			I	II	III	IV	V	早 春季	春 季	夏 季	秋 季	対象事業 実施区域	
												内	外
1	カバノキ	ヤエガワカンバ			NT	NT			○		○		
2	ケシ	ナガミノツルキケマン			NT	NT		○	○	○	○	○	
3	マメ	イヌハギ			VU	NT			○	○		○	
4	カタバミ	オオヤマカタバミ			VU	NT	○	○	○			○	
5	スイカズラ	オニヒョウタンボク			VU	NT	○	○	○	○	○	○	
6	キク	アワコガネギク			NT					○		○	
7	トチカガミ	ミズオオバコ			VU	VU			○			○	
8	イバラモ	イトトリゲモ			NT	CR			○			○	
9	ユリ	ヒメアマナ			EN	CR	○					○	
10		ヤマユリ			NT	○		○	○			○	
11	カヤツリグサ	ヌマガヤツリ			EN				○	○		○	
12	ラン	ギンラン			NT			○				○	
合計	11 科	12 種			9	11	1	3	5	9	5	3	11

注) 選定基準は表 5-11-4 に示す基準に準ずる。

表 5-11-11(1) 注目すべき種の生態・確認状況 (植物)

和名	一般的な生態	確認位置				確認状況
		対象事業実施区域				
		内		外		
		箇所数	株数	箇所数	株数	
ヤエガワカンバ	【分 布】 北海道 (十勝・日高地方)、本州中部地方。 【繁殖時期】 花期は 4-5 月。 【生育環境】 低山帯の向陽地。	1	1			対象事業実施区域内で確認された。確認環境は樹林であった。本種の生育環境である山地樹林の向陽地は調査地域内に広く分布している。
ナガミノツルキケマン	【分 布】 北海道、本州、九州。 【繁殖時期】 花期は 8-9 月。 【生育環境】 山地帯林下。	3	54	25	1,476	対象事業実施区域内外で確認された。確認環境は路傍、林縁等であった。本種の生育環境である路傍や林縁、林床等の環境は、調査地域内に広く分布している。

表 5-11-11(2) 注目すべき種の生態・確認状況 (植物)

和名	一般的な生態	確認位置				確認状況
		対象事業実施区域				
		内		外		
箇所数	株数	箇所数	株数			
イヌハギ	【分 布】 本州から琉球。 【繁殖時期】 花期は7-9月。 【生育環境】 日当たりのよい砂地等。			4	31	対象事業実施区域外で確認された。確認環境はススキ草地であった。本種の生育環境である日当たりの良い砂地は、調査地域内に広く分布している。
オオヤマカタバミ	【分 布】 本州中部地方、九州。 【繁殖時期】 花期は4-5月。 【生育環境】 山地帯-亜高山帯の林内。			2	40	対象事業実施区域外で確認された。確認環境は落葉広葉樹林等のみられる谷部であった。本種の生育環境である樹林環境は調査地域内に広く分布している。
オニヒヨウタンボク	【分 布】 本州(群馬県、長野県、広島県、島根県等)。 【繁殖時期】 花期は5月。 【生育環境】 山地。	2	5	1	1	対象事業実施区域内外で確認された。確認環境は落葉広葉樹林であった。本種の生育環境である樹林環境は、調査地域内に広く分布している。
アワコガネギク	【分 布】 本州(岩手県-近畿地方;太平洋側)、九州(壱岐・対馬)。 【繁殖時期】 花期は9月下旬-11月上旬。 【生育環境】 林縁や道端、土手、山麓のやや乾いた崖等に生育。草地に多いが、河原にも生える事がある。			5	55	対象事業実施区域外で確認された。確認環境は草地であった。本種の生育環境である林縁や崖地、草地等の環境は調査地域内に広く分布している。
ミズオオバコ	【分 布】 日本固有種。本州、四国、九州。 【繁殖時期】 花期は8-10月。 【生育環境】 低地の池、沼、溜池、水路、水田。			6	462	対象事業実施区域外で確認された。確認環境は水田であった。本種の生育環境である池や沼等の止水・緩流環境は調査地域内に広く分布している。
イトトリゲモ	【分 布】 本州、九州。 【繁殖時期】 花期は7-10月。 【生育環境】 山間の貧栄養な水田、溜池。			2	200	対象事業実施区域外で確認された。確認環境は水田であった。本種の生育環境である池や沼などの止水・緩流環境は調査地域内に広く分布している。
ヒメアマナ	【分 布】 日本固有種。本州、四国、九州。 【繁殖時期】 花期は4-5月。 【生育環境】 低山帯の湿った草原、林縁。			14	2,122	対象事業実施区域外で確認された。確認環境は谷部の林床であった。本種の生育環境である湿った草地、林縁環境は調査地域内の舟ヶ沢に分布している。
ヤマユリ	【分 布】 日本固有種。本州の近畿地方以北。 【繁殖時期】 花期は7-8月。 【生育環境】 草丈の高い草原、低山帯の林縁、疎林内。			5	35	対象事業実施区域外で確認された。確認環境は崖地であった。本種の生育環境である崖地は尾根上に点在しているものの、林縁や疎林環境は調査地域内に広く分布している。
ヌマガヤツリ	【分 布】 本州。 【繁殖時期】 花期は8-10月。 【生育環境】 水辺の湿地や川岸。			3	230	対象事業実施区域外で確認された。確認環境は湿地であった。本種の生育環境である湿地や川岸は調査地域内に点在している。
ギンラン	【分 布】 北海道、本州、四国、九州。 【繁殖時期】 花期は6月。 【生育環境】 低山帯の林内。			1	2	対象事業実施区域外で確認された。確認環境は樹林であった。本種の生息環境である樹林や林縁環境は調査地域内に広く分布している。

(2) 注目すべき個体、集団及び群落

現地調査の結果、表5-11-4に示す選定基準に該当並びに歴史的・文化的背景等の観点から抽出された注目すべき個体、集団及び群落は確認されなかった。

11-2 予測及び評価の結果

1. 予測

植物に係る予測の内容及び方法についての概要を表5-11-12(1)、(2)に示す。

1) 予測対象とする影響要因

対象事業の影響要因を踏まえ、工事中における土地造成、樹木の伐採に伴う植物（植物相、植生、注目すべき個体、集団、種及び群落）及び供用時における地形改変、建築物・工作物等の存在、夜間照明等に伴う植物（植物相、植生、注目すべき個体、集団、種及び群落）影響について予測を行った。

2) 予測地域及び地点

予測地域及び地点は、調査地域に準じた。

3) 予測対象時期

予測対象時期は、工事中における土地造成、樹木の伐採に伴う植物への影響については土地造成工事の工事中及び工事完了後、供用時における地形改変、建築物・工作物等の存在、夜間照明等に伴う植物への影響については施設が定常的に稼働する時期とした。

表 5-11-12(1) 植物に係る予測の内容及び方法（工事による影響）

影響要因の区分	予測事項	予測方法	予測地域・地点	予測対象時期	
工事による影響	土地造成 (切土・盛土)	植物 ・植物相 ・植生 ・注目すべき 個体、集 団、種及び 群落	直接的・間接的影響による 変化の程度又は消滅の有 無について、事業計画との 重ね合わせ、類似事例等 により予測	調査地域に準 じる	土地造成工事の 工事中及び工事 完了後
	樹木の伐採				

表 5-11-12(1) 植物に係る予測の内容及び方法（存在・供用による影響）

影響要因の区分	予測事項	予測方法	予測地域・地点	予測対象時期	
存在・供用による影響	地形改変	植物 ・植物相 ・植生 ・注目すべき 個体、集 団、種及び 群落	直接的・間接的影響による 変化の程度又は消滅の有 無について、事業計画との 重ね合わせ、類似事例等 により予測	調査地域に準 じる	施設が定常的に 稼働する時期
	建築物・工作物 等の存在				
	夜間照明等				

2. 工事中における土地造成、樹木の伐採に伴う植物への影響

1) 予測項目

予測項目は、工事中における土地造成、樹木の伐採に伴う植物（植物相、植生及び注目すべき種）への影響の程度とした。

なお、注目すべき個体、集団及び群落については、調査で確認されなかったことから予測の対象から除外した。

2) 予測地域及び地点

予測地域及び地点は、調査地域に準じた。

3) 予測対象時期

予測対象時期は、土地造成工事の工事中及び工事完了後とした。

4) 予測方法

直接的・間接的影響に伴う変化の程度又は消滅の有無について、事業計画との重ね合わせ、類似事例等により予測した。

5) 予測結果

工事中における土地造成及び樹木の伐採に伴う植物相への影響の予測結果を表5-11-13に、植生への影響の予測結果を表5-11-14に、注目すべき種への影響の予測結果を表5-11-15(1)～(3)に示す。

植物相については調査地域内の種数の変化に対する影響予測を、植生については群落及びその面積の変化の程度についての影響予測を、注目すべき種については、生育状況変化の程度及び消滅の有無について予測を行った。

表 5-11-13 工事中における植物相への影響予測結果

分類	確認状況								影響予測 (工事による影響)	
	対象事業実施区域								直接的影響	間接的影響
	のみ		内		外		計			
	科数	種数	科数	種数	科数	種数		科数		
植物相	22	35	202	334	113	581	113	615	<p>対象事業実施区域外での確認種は多く、対象事業実施区域内でのみ確認された種は全確認種のうち約 5.4%と少ないことから、工事による直接的影響は極めて少ないと予測する。</p> <p>陸域については、対象事業実施区域周辺に特殊な植物生育基盤は確認されておらず、予測地域内に広く分布している群落により構成されていることから、工事による間接的影響は極めて小さいと予測する。</p> <p>水域における濁水の発生に伴う影響については、本事業では沈砂槽を設け濁水の発生を防止する計画であることから、水域及びその周辺に生育する植物相への工事による間接的影響はないと予測する。</p>	

表 5-11-14 工事中における植生への影響予測結果

群落等	確認位置		影響予測 (工事による影響)	
	対象事業実施区域		直接的影響	間接的影響
	内	外		
クリーミズナラ群落		○	<p>対象事業実施区域内において約半分の範囲を占めるカスミザクラ・コナラ群落、その他、割合が多い群落としてススキ軍団、路傍・空地雑草群落が消滅するものの、予測地域全体としての変化は小さいことから、工事による直接的影響は極めて小さいと予測する。</p> <p>対象事業実施区域に隣接する植生に対し日照条件の変化、風当たりの変化、水分条件の変化等により生じ、明るく乾燥した環境を好む植生への変化が考えられることから、工事による間接的影響が生じると予測する。</p> <p>なお、濁水の発生に伴う影響については、本事業では沈砂槽を設け濁水の発生を防止する計画であることから、対象事業実施区域下流に位置する植生への工事による間接的影響はないと予測する。</p>	
カスミザクラ・コナラ群落	○	○		
ケヤキ群落		○		
アカマツ群落		○		
ススキ群団	○	○		
ツルヨシ群落		○		
スギ・ヒノキ・サワラ植林	○	○		
カラマツ植林	○	○		
ハリエンジュ群落		○		
イタチハギ群落		○		
竹林		○		
路傍・空地雑草群落	○	○		
畑地		○		
水田		○		
人工地	○	○		
開放水面		○		

表 5-11-15(1) 工事中における注目すべき種への影響予測結果

和名	確認位置				影響予測 (工事による影響)	
	対象事業 実施区域				直接的影響	間接的影響
	内		外			
	箇所 数	株 数	箇所 数	株 数		
ヤエガワカンバ	1	1			本種の生育環境である山地樹林の向陽地は対象事業実施区域外にも存在するものの、本種は対象事業実施区域内でのみ確認されており、工事による直接的影響は大きいと予測する。	本種は対象事業実施区域内でのみ確認されていることから、間接的影響の予測対象外とする。
ナガミノツルキケマン	3	54	25	1,476	対象事業実施区域内の個体は消滅するものの、本種は予測地域内で広く確認されており、生育環境となる路傍、林縁等の環境も広く分布していることから、工事による直接的影響は極めて小さいと予測する。	建設機械の稼働及び工事用車両の走行に伴って発生する粉じんの付着により、光合成の阻害が生じる可能性が考えられることから、特に対象事業実施区域周辺に生育する個体については、工事による間接的影響が生じると予測する。
イヌハギ			4	31	対象事業実施区域外でのみ確認されている。本種の生育環境である日当たりのよい砂地等の環境は対象事業実施区域内に存在しないことから、工事による直接的影響はないと予測する。	建設機械の稼働及び工事用車両の走行に伴って発生する粉じんの付着により、光合成の阻害が生じる可能性が考えられるものの、多くの個体は対象事業実施区域から十分に距離が離れた箇所には生育していることから、工事による間接的影響は極めて小さいと予測する。
オオヤマカタバミ			2	40	対象事業実施区域外でのみ確認されている。本種の生育環境である山地樹林は対象事業実施区域外にも広くみられることから、工事による直接的影響は極めて小さいと予測する。	建設機械の稼働及び工事用車両の走行に伴って発生する粉じんの付着により、光合成の阻害が生じる可能性が考えられるものの、確認個体は対象事業実施区域から十分に距離が離れた箇所には生育していることから、工事による間接的影響は極めて小さいと予測する。
オニヒョウタンボク	2	5	1	1	本種の生育環境である明るい落葉広葉樹林は対象事業実施区域外にも存在するものの、対象事業実施区域内で多く確認されていることから、工事による直接的影響は大きいと予測する。	建設機械の稼働及び工事用車両の走行に伴って発生する粉じんの付着により、光合成の阻害が生じる可能性が考えられること、対象事業実施区域に隣接した箇所を確認されていることから、工事による間接的影響は大きいと予測する。

表 5-11-15(2) 工事中における注目すべき種への影響予測結果

和名	確認位置				影響予測 (工事による影響)	
	対象事業 実施区域				直接的影響	間接的影響
	内		外			
	箇所 数	株 数	箇所 数	株 数		
アワコガネギク			5	55	対象事業実施区域外でのみ確認されている。本種の生息環境である林縁や路傍、崖地の乾いた環境は対象事業実施区域外にも広くみられることから、工事による直接的影響は極めて小さいと予測する。	建設機械の稼働及び工事用車両の走行に伴って発生する粉じんの付着により、光合成の阻害が生じる可能性が考えられること、対象事業実施区域に隣接した箇所でも多くの個体が確認されていることから、工事による間接的影響は大きいと予測する。
ミズオオバコ			6	462	対象事業実施区域外の湯川沿いの水田のみで確認されている。対象事業実施区域内には本種の生育環境となる水田や流れの緩い河川などは存在しないことから、工事による直接的影響はないと予測する。	対象事業実施区域外の湯川沿いの水田のみで確認されている。対象事業実施区域下流域に生育する個体については、濁水の発生に伴う影響を受ける可能性が考えられるが、本事業では沈砂槽を設け、濁水の発生を防止する計画であることから、工事による間接的影響はないと予測する。
イトトリゲモ			2	200	対象事業実施区域外の湯川沿いの水田でのみで確認されている。対象事業実施区域内には、本種の生育環境となる水田や流れの緩い河川などは存在しないことから、工事による直接的影響はないと予測する。	対象事業実施区域外の水田のみで確認されている。濁水の発生に伴う影響が考えられるが、本種は対象事業実施区域及びその下流域で確認されていないことから、工事による間接的影響はないと予測する。
ヒメアマナ			14	2,122	対象事業実施区域外でのみ確認されている。対象事業実施区域内には本種の生育環境となる日当たりの良い湿った場所も存在しないことから、工事による直接的影響はないと予測する。	建設機械の稼働及び工事用車両の走行に伴って発生する粉じんの付着により、光合成の阻害が生じる可能性が考えられるものの、多くの個体は対象事業実施区域から十分に距離が離れた箇所に生育していることから、工事による間接的影響は極めて小さいと予測する。
ヤマユリ			5	35	対象事業実施区域外でのみ確認されている。本種の生育環境である疎林や林縁環境は対象事業実施区域外に広くみられることから、工事による直接的影響は極めて小さいと予測する。	建設機械の稼働及び工事用車両の走行に伴って発生する粉じんの付着により、光合成の阻害が生じる可能性が考えられるものの、確認個体は対象事業実施区域から十分に距離が離れた箇所に生育していることから、工事による間接的影響は極めて小さいと予測する。

表 5-11-15(3) 工事中における注目すべき種への影響予測結果

和名	確認位置				影響予測 (工事による影響)	
	対象事業 実施区域				直接的影響	間接的影響
	内		外			
	箇所 数	株 数	箇所 数	株 数		
ヌマガヤツリ			3	230	<p>対象事業実施区域外でのみ確認されている。対象事業実施区域内には本種の生育環境となる日当たりの良い湿った場所が存在しないことから、工事による直接的影響はないと予測する。</p> <p>建設機械の稼働及び工事用車両の走行に伴って発生する粉じんの付着により、光合成の阻害が生じる可能性が考えられることから、工事による間接的影響が生じると予測する。</p> <p>対象事業実施区域下流域に生育する個体については、濁水の発生に伴う影響を受ける可能性が考えられるが、本事業では沈砂槽を設け、濁水の発生を防止する計画であることから、工事による間接的影響はないと予測する。</p>	
ギンラン			1	2	<p>対象事業実施区域外でのみ確認されている。本種の生育環境である二次林等の樹林環境は対象事業実施区域外に広く分布しており、工事による直接的影響は極めて小さいと予測する。</p> <p>本種は対象事業実施区域に隣接する樹林に生育していることから、日照条件の変化、風当たりの変化、水分条件の変化等が考えられ、明るく乾燥した環境を好む植生への変化が考えられること、対象事業実施区域に隣接した箇所で確認されていることから、工事による間接的影響は大きいと予測する。</p>	

6) 予測結果の信頼性

予測結果の信頼性に係る予測条件の設定内容及び予測結果との関係を表5-11-16に示す。

表 5-11-16 予測の信頼性に係る条件設定内容と予測結果との関係

項目	設定内容	予測結果との関係
対象事業計画の重ね合わせや科学的知見による予測	直接的影響の予測を行うにあたって一般的に用いられている手法であり、長野県環境影響評価技術指針にも示されている。	直接的影響は対象事業実施区域内に生育する対象種にのみ影響を与えることから、予測の不確実性は小さいと考える。
類似事例及び経験等による予測	間接的影響の予測を行うにあたって一般的に用いられている手法であり、長野県環境影響評価技術指針にも示されている。	間接的影響の予測には不確実性があるものの、想定される影響及びその範囲を大きく設定し予測を行っていることから、不確実性は小さいと考える。

7) 環境保全措置の内容と経緯

本事業の実施にあたっては、できる限り環境への影響を低減させるものとし、表5-11-17に示す環境保全措置を講じる。

また、環境保全措置の具体的な内容を表5-11-18(1)～(3)に示す。

表 5-11-17 環境保全措置（土地造成、樹木伐採に伴う植物への影響）

No.	名称	環境保全措置の概要	環境保全措置の種類 ^{注)}
1	対象事業実施区域境界の林縁保護	・対象事業実施区域周辺の森林の保護を目的に、対象事業実施区域境界に適宜防風ネットや遮光ネット等を設置することで、樹木の保全を図る。	低 減
2	粉じんの防止	・工事中の粉じんによる植物への影響を低減させることを目的に、適宜散水を実施することで、粉じんの発生を防止する。	低 減
3	成木の移植	・対象事業実施区域内に生育する注目すべき種の成木について、対象種の生育に適した環境に移植を行うことで、種の保全を図る。	代 償
4	稚樹の移植	・対象事業実施区域内で確認された移植対象種の稚樹を採取・育苗し、対象種の生育に適した環境に移植を行うことで、種の保全を図る。	代 償
5	種子の保存及び播種、育苗	・成熟した種子を採取し、保存及び播種・育苗を行うことで、種の保全を図る。	代 償
6	挿し木の実施	・挿し木による個体の増殖が可能な種について、挿し木を実施することで種の保全を図る。	代 償
7	工事関係者への啓発	・工事関係者及び作業員に対して、対象事業実施区域外への不用意な立ち入りを抑制するなどの指導を行う。	低 減

注) 【環境保全措置の種類】

回 避：全部又は一部を行わないこと等により、影響を回避する。

最小化：実施規模又は程度を制限すること等により、影響を最小化する。

修 正：影響を受けた環境を修復、回復又は復元すること等により、影響を修正する。

低 減：継続的な保護又は維持活動を行うこと等により、影響を低減する。

代 償：代用的な資源もしくは環境で置き換え又は提供すること等により、影響を代償する。

表 5-11-18(1) 項目別環境保全措置

項目	環境保全措置		実施期間	効果の不確実性	他の環境要素への影響	
	No. 及び名称 ^{注)}	具体的内容				
植生	1. 対象事業実施区域周辺の林縁保護	対象事業実施区域の切土に隣接する樹林の林縁に防風ネット等を設置することで、樹林内の植生への影響を低減することが可能である。	工事中	なし	なし	
	2. 粉じんの防止	散水を実施することで、粉じんの発生を防止し、対象事業実施区域周辺に生育する植物への粉じんが付着することによる影響を低減することが可能である。	工事中	なし	なし	
注目すべき種	ヤエガワカンバ	3. 成木の移植	生育箇所に比較的近い対象事業実施区域外の斜面地に根鉢ごと個体の移植を行う。 なお、保全措置の効果については不確実性が考えられることから、保全措置実施後に生育状況のモニタリングを実施する。	工事前	モニタリングが必要	移植先の植生に留意
		4. 稚樹の移植	対象事業実施区域内で稚樹を確認し、根鉢ごと個体の移植を行う。 なお、環境保全措置の効果については不確実性が考えられることから、保全措置実施後に生育状況のモニタリングを実施する。	工事前	モニタリングが必要	なし
		5. 種子の保存及び播種、育苗	本種は、人為的管理下において播種・育苗事例が存在することから、本保全措置を採用する。適期に種子を採取し、播種を行う。 なお、環境保全措置の効果については不確実性が考えられることから、保全措置実施後に生育状況のモニタリングを実施する。	工事前	モニタリングが必要	なし
	ナガミノツルキケマン	2. 粉じんの防止	散水を実施することで、粉じんの発生を防止し、対象事業実施区域周辺に生育する本種への粉じんの付着による影響を低減することが可能である。	工事中	なし	なし

注) 環境保全措置の No. 及び名称については、表 5-11-17 内の No. に対応する。

表 5-11-18(2) 項目別環境保全措置

項目	環境保全措置		実施 期間	効果の不 確実性	他の環境 要素への 影響	
	No. 及び名称 ^{注)}	具体的内容				
注目すべき種	オニヒョウタンボク	2. 粉じんの防止	散水を実施することで、粉じんの発生を防止し、対象事業実施区域周辺に生育する本種への粉じんの付着による影響を低減することが可能である。	工事中	なし	なし
		3. 成木の移植	本種は低木種であるため、根鉢移植が可能であることから、本保全措置を採用する。早春季、もしくは秋季に、根鉢ごと移植を行う。なお、環境保全措置の効果については不確実性が考えられることから、保全措置実施後に生育状況のモニタリングを実施する。	工事前	モニタリングが必要	なし
		5. 種子の保存及び播種、育苗	本種は種子繁殖を行うことから、本保全措置を採用する。種子採取に際しては、本種の種子が熟す7～8月に種子を採取する。なお、環境保全措置の効果については不確実性が考えられることから、保全措置実施後に生育状況のモニタリングを実施する。	工事前	モニタリングが必要	なし
		6. 挿し木の実施	本種の近縁種であるヒョウタンボクにおける挿し木の事例が存在することから、本保全措置を採用する。挿し木に際しては、早春季に挿し穂を採取する。なお、環境保全措置の効果については不確実性が考えられることから、保全措置実施後に生育状況のモニタリングを実施する。	工事前	モニタリングが必要	なし
	アワコガネギク	2. 粉じんの防止	散水を実施することで、粉じんの発生を防止し、対象事業実施区域周辺に生育する植物相へ粉じんの付着による影響を低減することが可能である。	工事中	なし	なし
	ヌマガヤツリ	2. 粉じんの防止	散水を実施することで、粉じんの発生を防止し、対象事業実施区域周辺に生育する植物相へ粉じんの付着による影響を低減することが可能である。	工事中	なし	なし

注) 環境保全措置の No. 及び名称については、表 5-11-17 内の No. に対応する。

表 5-11-18(3) 項目別環境保全措置

項目	環境保全措置		実施期間	効果の不確実性	他の環境要素への影響	
	No. 及び名称 ^{注)}	具体的内容				
注目すべき種	ギンラン	1. 対象事業実施区域周辺の林縁保護	対象事業実施区域の切土に隣接する樹林の林縁に防風ネット等を設置することで、本種への影響を低減することが可能である。 なお、本種は対象事業実施区域至近に生育しており、保全措置の効果については不確実性が考えられることから、保全措置実施後に生育状況のモニタリングを実施する。	工事中	モニタリングが必要	なし
		2. 粉じんの防止	散水を実施することで、粉じんの発生を防止し、対象事業実施区域周辺に生育する本種への粉じんが付着することによる影響を低減することが可能である。 なお、本種は対象事業実施区域至近に生育しており、保全措置の効果については不確実性が考えられることから、保全措置実施後に生育状況のモニタリングを実施する。	工事中	モニタリングが必要	なし

注) 環境保全措置のNo. 及び名称については、表 5-11-17 内のNo. に対応する。

8) 評価方法

調査及び予測の結果並びに検討した環境保全措置の内容を踏まえ、以下の観点から評価を行った。

① 環境への影響の緩和の観点

植物に係る環境影響が、実行可能な範囲でできる限り緩和され、環境保全についての配慮が適正になされているかどうかを検討した。

9) 評価結果

(1) 環境への影響の緩和に係る評価

事業の実施にあたっては、「7) 環境保全措置の内容と経緯」に示したように、事業者としてできる限り環境への影響を緩和するため、「対象事業実施区域周辺の林縁保護」、「粉じんの防止」、「成木の移植」、「稚樹の移植」、「種子の保存及び播種、育苗」、「挿し木」といった環境保全措置を講じる計画である。

なお、注目すべき種のうち、個体の消失により影響が大きいと予測したヤエガワカンバ、オニヒョウタンボクについては、「成木の移植」、「稚樹の移植」、「種子の保存及び播種、育苗」、「挿し木」といった環境保全措置を実施することで種の保全を行う。

また、間接的影響が大きいと予測したオニヒョウタンボク、アワコガネギク、ギンランについては、「対象事業実施区域周辺の林縁保護」、「粉じんの防止」といった環境保全措置を実施することで影響の低減を図る。

以上のことから、工事中における土地造成、樹木の伐採に伴う植物への影響については、環境への影響の緩和に適合するものと評価する。

3. 供用時における地形改変、建築物・工作物等の存在、夜間照明等に伴う植物への影響

1) 予測項目

予測項目は、供用時における地形改変、建築物・工作物等の存在、夜間照明等に伴う植物（植物相、植生及び注目すべき種）への影響の程度とした。

なお、注目すべき個体、集団及び群落については、調査で確認されなかったことから予測の対象から除外した。

2) 予測地域及び地点

予測地域及び地点は、調査地域に準じた。

3) 予測対象時期

予測対象時期は、施設が定常的に稼働する時期とした。

4) 予測方法

直接的・間接的影響に伴う変化の程度又は消滅の有無について、事業計画との重ね合わせ、類似事例等により予測した。

5) 予測結果

供用時における地形改変、建築物・工作物等の存在、夜間照明等に伴う植物相への予測結果を表5-11-19に、植生への予測結果を表5-11-20に、注目すべき種への影響の予測結果を表5-11-21(1)～(3)に示す。

植物相については調査地域内の種数の変化に対する影響予測を、植生については群落及びその面積の変化の程度についての影響予測を、注目すべき種については、生育の変化の程度及び消滅の有無について予測を行った。

なお、供用時における影響のうち、直接的影響については、本事業による影響が最大となる時点は工事中及び工事完了後であり、施設が定常的に稼働する時期の直接的影響については、工事中及び工事完了後の直接的影響から付加されるものではない。よって、供用時における直接的影響予測については、工事中における直接的影響予測結果に準じることから、間接的影響のみ予測を行うこととした。

表 5-11-19 存在・供用による植物相への影響予測結果

分類	確認状況								影響予測 (存在・供用による影響)	
	対象事業実施区域								直接的影響	間接的影響
	のみ		内		外		計			
	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数		
植物相	22	35	202	334	113	581	113	615	存在・供用による影響は、工事による直接的影響予測結果に準じる。	陸域については、対象事業実施区域周辺に特殊な植物生育基盤は確認されておらず、予測地域内に広く分布している群落により構成されていることから、存在・供用による間接的影響は極めて小さいものと予測する。 施設からの排水のうち、プラント排水は無放流とし、生活排水及び雨水排水については適切な処理の後、公共用水域に放流する計画であることから、水域及びその周辺に生息する植物相に係る間接的影響はないと予測する。 屋外夜間照明の影響により、対象事業実施区域に隣接する地域の光環境の変化が考えられ、植生が変化する可能性が考えられることから、存在・供用による間接的影響が生じると予測する。

表 5-11-20 存在・供用による植生への影響予測結果

群落等	確認位置		影響予測 (存在・供用による影響)	
	対象事業実施区域		直接的影響	間接的影響
	内	外		
クリーミズナラ群落		○	存在・供用による影響は、工事による直接的影響予測結果に準じる。	地形改変及び建築物・工作物の存在の影響による、対象事業実施区域に隣接する地域の日照条件の変化、風当たりの変化、水分条件の変化等により、植生が変化する可能性が考えられることから、存在・供用による間接的影響が生じると予測する。 施設からの排水のうち、プラント排水は無放流とし、生活排水及び雨水排水については適切な処理の後、公共用水域に放流する計画であることから、水域及びその周辺に分布する植生に係る間接的影響はないと予測する。 屋外夜間照明の影響により、対象事業実施区域に隣接する地域の光環境の変化が考えられ、植生が変化する可能性が考えられることから、存在・供用による間接的影響が生じると予測する。
カスミザクラ・コナラ群落	○	○		
ケヤキ群落		○		
アカマツ群落		○		
ススキ群団	○	○		
ツルヨシ群落		○		
スギ・ヒノキ・サワラ植林	○	○		
カラマツ植林	○	○		
ハリエンジュ群落		○		
イタチハギ群落		○		
竹林		○		
路傍・空地雑草群落	○	○		
畑地		○		
水田		○		
人工地	○	○		
開放水面		○		

表 5-11-21(1) 存在・供用による注目すべき種への影響予測結果

和名	確認位置・状況				影響予測 (存在・供用による影響)	
	対象事業 実施区域				直接的影響	間接的影響
	内		外			
	箇所 数	株 数	箇所 数	株 数		
ヤエガワカンバ	1	1			本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	本種は対象事業実施区域内でのみ確認されていることから、間接的影響の予測対象外とする。
ナガミノツルキケマン	3	54	25	1,476	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	屋外夜間照明の影響により、光環境の変化が考えられることから、特に対象事業実施区域周辺に生育する個体については存在・供用による間接的影響が生じると考えられる。
イヌハギ			4	31	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	屋外夜間照明の影響により、光環境の変化が考えられることから特に対象事業実施区域周辺に生育する個体については存在・供用による間接的影響が生じると考えられるものの、多くの個体は対象事業実施区域から十分離れた箇所にて生育していることから、存在・供用による間接的影響は極めて小さいと予測する。
オオヤマカタバミ			2	40	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	屋外夜間照明による光環境の変化から、存在・供用による間接的影響が生じると考えられるものの、確認個体は対象事業実施区域から十分に距離が離れた箇所にて生育していることから、存在・供用による間接的影響は極めて小さいと予測する。
オニヒョウタンボク	2	5	1	1	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	屋外夜間照明の影響により、光環境の変化が考えられること、対象事業実施区域に隣接した箇所にて確認されていることから、存在・供用による間接的影響は大きいと予測する。

表 5-11-21 (2) 存在・供用による注目すべき種への影響予測結果

和名	確認位置・状況				影響予測 (存在・供用による影響)	
	対象事業 実施区域				直接的影響	間接的影響
	内		外			
	箇所数	株数	箇所数	株数		
アワコガネギク			5	55	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	屋外夜間照明の影響により、光環境の変化が考えられること、対象事業実施区域に隣接した箇所で多くの個体が確認されていることから、存在・供用による間接的影響は大きいと予測する。
ミズオオバコ			6	462	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	施設からの排水のうち、プラント排水は無放流とし、生活排水及び雨水排水については適切な処理の後、公共用水域に放流する計画であることから、本種に係る間接的影響はないと予測する。 また、屋外夜間照明の影響により、光環境の変化が考えられることから特に対象事業実施区域周辺に生育する個体については存在・供用による間接的影響が生じると考えられるものの、対象事業実施区域からは高低差があり、夜間照明が届かないと考えられることから、存在・供用による間接的影響は極めて小さいと予測する。
イトトリゲモ			2	200	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	施設からの排水のうち、プラント排水は無放流とし、生活排水及び雨水排水については適切な処理の後、公共用水域に放流する計画であることから、本種に係る間接的影響はないと予測する。 また、屋外夜間照明の影響により、光環境の変化が考えられることから特に対象事業実施区域周辺に生育する個体については存在・供用による間接的影響が生じると考えられるものの、対象事業実施区域からは高低差があり、夜間照明が届かないと考えられることから、存在・供用による間接的影響は極めて小さいと予測する。

表 5-11-21(3) 存在・供用による注目すべき種への影響予測結果

和名	確認位置・状況				影響予測 (存在・供用による影響)	
	対象事業 実施区域				直接的影響	間接的影響
	内		外			
	箇所数	株数	箇所数	株数		
ヒメアマナ			14	2,122	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	屋外夜間照明の影響により、光環境の変化が考えられることから特に対象事業実施区域周辺に生育する個体については存在・供用による間接的影響が生じると考えられるものの、多くの個体は対象事業実施区域から十分離れた箇所に生育していることから、存在・供用による間接的影響は極めて小さいと予測する。
ヤマユリ			5	35	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	屋外夜間照明による光環境の変化から、存在・供用による間接的影響が生じると考えられるものの、確認個体は対象事業実施区域から十分に距離が離れた箇所に生育していることから、存在・供用による間接的影響は極めて小さいと予測する。
ヌマガヤツリ			3	230	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	施設からの排水のうち、プラント排水は無放流とし、生活排水及び雨水排水については適切な処理の後、公共用水域に放流する計画であることから、本種に係る間接的影響はないと予測する。 また、屋外夜間照明の影響により、光環境の変化が考えられることから、特に対象事業実施区域周辺に生育する個体については存在・供用による間接的影響が生じると考えられる。
ギンラン			1	2	本種に対する存在・供用による影響は、工事による直接的影響の予測結果に準じる。	地形改変及び建築物・工作物の存在による日照条件の変化、風当たりの変化、水分条件の変化により、生育環境が変化することが、対象事業実施区域に隣接した箇所で確認されていることから、存在・供用による間接的影響は大きいと予測する。 また、屋外夜間照明の影響により、光環境の変化が考えられることから、対象事業実施区域に隣接した箇所で確認されていることから、存在・供用による間接的影響が生じると予測する。

6) 予測結果の信頼性

予測結果の信頼性に係る予測条件の設定内容及び予測結果との関係を表5-11-22に示す。

表 5-11-22 予測の信頼性に係る条件設定内容及び予測結果との関係

項目	設定内容	予測結果との関係
対象事業計画の重ね合わせや科学的知見による予測	直接的影響の予測を行うにあたって一般的に用いられている手法であり、長野県環境影響評価技術指針にも示されている。	直接的影響は対象事業実施区域内に生育する対象種にのみ影響を与えることから、予測の不確実性は小さいと考える。
類似事例及び経験則等による予測	間接的影響の予測を行うにあたって一般的に用いられている手法であり、長野県環境影響評価技術指針にも示されている。	間接的影響の予測には不確実性があるものの、想定される影響及びその範囲を大きく設定し予測を行っていることから、不確実性は小さいと考える。

7) 環境保全措置の内容と経緯

本事業の実施にあたっては、できる限り環境への影響を低減させることとし、表5-11-23に示す環境保全措置を講じる。

また、環境保全措置の具体的な内容を表5-11-24に示す。

表 5-11-23 環境保全措置

(地形改変、建築物・工作物等の存在、夜間照明等に伴う植物への影響)

No.	名称	環境保全措置の概要	環境保全措置の種類 ^{注)}
1	夜間照明光拡散の低減等	<ul style="list-style-type: none"> 屋外夜間照明の照明器具内にはルーバーを取り付け、光の照射範囲を限定することで、周辺へ光漏れを低減する。 夜間の照明は最小限とする。 可能な限りセンサー式照明を用い照明使用時間を短縮する。 	最小化
2	敷地内の緑地整備	<ul style="list-style-type: none"> 周辺緑地との調和に配慮し、駐車場や残地緑地と一体的に緑地整備を行うなど、可能な限り敷地内の緑地整備を行う。 	修正
3	林縁植栽の整備	<ul style="list-style-type: none"> 周辺緑地の保護のため、対象事業実施区域境界に在来種を用いた林縁植栽（ソデ・マント群落）等を施し、周辺緑地の植生の保全を図る。 	低減

注)【環境保全措置の種類】

回避：全部又は一部を行わないこと等により、影響を回避する。

最小化：実施規模又は程度を制限すること等により、影響を最小化する。

修正：影響を受けた環境を修復、回復又は復元すること等により、影響を修正する。

低減：継続的な保護又は維持活動を行うこと等により、影響を低減する。

代償：代用的な資源もしくは環境で置き換え又は提供すること等により、影響を代償する。

表 5-11-24 項目別環境保全措置

項目	環境保全措置		実施 期間	効果の不 確実性	他の環境 要素への 影響	
	No. 及び名称 ^{注)}	具体的内容				
植生	1. 夜間照明光拡散の低減等	対象事業実施区域内の屋外照明に用いることで、周辺への光による影響を低減することが可能である。	供用中	なし	なし	
	2. 敷地内の緑地整備	周辺緑地との調和に配慮し、駐車場や残地緑地と一体的に緑地整備を行うなど、可能な限り敷地内の緑地整備を行う。	供用前～	なし	なし	
	3. 林縁植栽の整備	周辺緑地の保護のため、対象事業実施区域境界に在来種を用いた林縁植栽（ソデ・マント群落）等を施し、周辺緑地の植生の保全を図る。	供用前～	なし	なし	
注目すべき種	ナガミノツルキケマン	1. 夜間照明光拡散の低減等	対象事業実施区域内の屋外照明に用いることで、周辺への光による影響を低減することが可能である。	供用中	なし	なし
	オニヒョウタンボク	1. 夜間照明光拡散の低減等	対象事業実施区域内の屋外照明に用いることで、周辺への光による影響を低減することが可能である。	供用中	なし	なし
	アワコガネギク	1. 夜間照明光拡散の低減等	対象事業実施区域内の屋外照明に用いることで、周辺への光による影響を低減することが可能である。	供用中	なし	なし
	ヌマガヤツリ	1. 夜間照明光拡散の低減等	対象事業実施区域内の屋外照明に用いることで、周辺への光による影響を低減することが可能である。	供用中	なし	なし
	ギンラン	1. 夜間照明光拡散の低減等	対象事業実施区域内の屋外照明に用いることで、周辺への光による影響を低減することが可能である。	供用中	なし	なし
3. 林縁植栽の整備		周辺緑地の保護のため、対象事業実施区域境界に在来種を用いた林縁植栽（ソデ・マント群落）等を施し、周辺緑地の植生の保全を図る。	供用前～	なし	なし	

注) 環境保全措置の No. 及び名称については、表 5-11-23 内の No. に対応する。

8) 評価方法

調査及び予測の結果並びに検討した環境保全措置の内容を踏まえ、以下の観点から評価を行った。

① 環境への影響の緩和の観点

植物に係る環境影響が、実行可能な範囲でできる限り緩和され、環境保全についての配慮が適正になされているかどうかを検討した。

9) 評価結果

(1) 環境への影響の緩和に係る評価

事業の実施にあたっては、「7) 環境保全措置の内容と経緯」に示したように、事業者としてできる限り環境への影響を緩和するため、「夜間照明光拡散の低減等」、「敷地内の緑地整備」、「林縁植栽の整備」といった環境保全措置を講じる計画である

なお、注目すべき種のうち、間接的影響が大きいと予測したオニヒョウタンボク、アワコガネギク、ギンランについては、「林縁植栽の整備」といった環境保全措置を実施することで影響の低減を図る。

以上のことから、供用時における地形改変、建築物・工作物等の存在、夜間照明等に伴う植物への影響については、環境への影響の緩和に適合するものと評価する。

